



里山の花畠・里の小屋友の会代表 櫻田稔さんに聞きました

去年12月群馬県は～ネイチャーポジティブ宣言～を行いました。
その活動に賛同し、早速森の再生に取り組んだ櫻田稔さんにお話し伺いました。

—ネイチャーポジティブということ

櫻田 当たり前の事。この自然を経済経済と追っているうち、大切な自然、植物、生物動物、人間の環境、すべてが破壊、劣化していくのを見直し、自然や生物すべての回復と再生、自然を守ることを重要課題にしようという取り組みかな。

—実際の櫻田さんの取り組みは

櫻田 安中にある崇台山のふもとに「里山の花畠・里の小屋友の会」と称して里山再生活動をしたのがきっかけです。とにかく群馬百名山の場所で自然の宝庫、まだ手付かずの山や森は荒らされていない聖地なのに、荒れ放題でした。手を入れると限りない世界が広がります。花は咲き乱れ、虫も鳥も生き生きしている。川には蛍が来るし、めったに見られない「幸せの青い蜂」やエメラルドグリーンの「宝石蜂」がきれいな空に飛び交うのを見ると、ほんと、自然の恵みは、気持ちを優しくさせる実感しますよね。

左から里見先生、櫻田さん、岡部さん。



幸せの青い蜂
吸蜜するルリモンハナバチ

地元の人たちの協力で、希少な宝物のような生き物たちがそれこそ自然によってくる。帰ってくる。もう絶滅かと言われた草花が群生している。土を優しく保護することの楽しみは言葉でいえません。

—本当に私も訪ねてみて感動しました。虫が嫌なんて言っていましたが、静かに飛んでいるのを追っかけたり、花や草を見ていて、藍や茜に目を輝かせたりしているうち、ともに生きているものすべてと共に生という意味が分かったような気になりました。

櫻田 こうした場所に多くの人に来てほしいと思う反面、人に荒らされてしまうのでは、と言った不安もありますがね、今だったら、捕獲されたり、根こそぎ引き抜いていってしまうとか、心ない人もいますからね。だからこそ、自然に対しての対処の教育がより大切になってくると思うし、こうした自然を守りたいという気持ちが強くなればなるほど、手は抜けない。継続の大切さをかんじています。同じ生き物、自然からいっぱい恵みをもらっているという心が我々に必要だし、ネイチャーポジティブ宣言の底に流れていなくてはならないと、おもいますよ。

櫻田さんは自然共生サイトに正式に認定されました。私達ねぎぼうず館も《ものがたり山プロジェクト》として情報を共有し、ともに自然共生、ネイチャーポジティブを軸に様々な取り組みを実行してまいりたいと思います。

ききて 西館 好子

手づくり教室開設に向けて
手作りにこだわって

手仕事や主宰 上原孝子

群馬県から富岡市に移管された社会教育会館の館長に就任したころの仕事はまずは館を市民に知つてもらうことでした。自分の好きで楽しいこと、身近に心に残る手作りのものを作つてみようと草履づくりや、染め物教室などしました。富岡製糸場という女性たちの仕事でにぎわつた町と絹は子供の頃の私の記憶の中に残つていたせいかもしれません。

その頃は、富岡製糸場を世界遺産にの気運が高まつていて、私も懐かしい絹への思いが、もうあまり着なくなつていてる絹の着物のリメイクや、着物にまつわる着付けや小物づくりに自分の夢が広がつていくのを感じました。実際、家でも養蚕をしていましたから、母や祖母の蚕への思いが私に伝わつたのかもしれません。自分も繭を顔にして、シルクの衣装を着せ、製糸場の見学者に差し上げたりしました。

本当にあまりに手作りにのめりきつてとうとう手を痛めてしましました。下仁田で女性村ができ、私の作品の展示と販売をしたら、というお誘いで再び手作りに心が動きました。親が残してくれた着物たちがタンスごと売られたり、捨てられる時代。痛ましいしかわいいそう。着物を着ない時代といえ絹は素晴らしい歴史と文化を持ち、リメイクで私たちの生活に潤いや優しさをくれるもので。女性たちのホルモンにまで影響するという絹を改めて女性に見直してほしいと、ねぎぼうず館では「手作り教室始めます」

実際、ここで優勝祈願をした県内の高校が夏の甲子園で日本一になったことがあります。もちろんそれは選手たちの弛まぬ努力によつて達成されたものでようが、少なからず大黒様のご利益もあつたのでしょうと言つてみたいところでもあります。

さて次に中之嶽神社ですが、ここをお参りするには相当の覚悟が必要です。陥しく長い石段を登つて行かなくてはならず、しかもその石は長い年月で風化され表面がどこになつていて、歩きづらいことこの上ないからです。石段の数は一四五段、もし途中で足を踏み外したらご利益どころの話ではなくつてしまします。一段一段慎重に歩を進めていくと、上方に神社の拝殿とその背後にそびえる轟岩（とどろきいわ）が見えてきます。轟岩は高さが數十メートルあるかと思われる尖った大きな岩で、これが中之嶽神社の御神体となっています。そのためこ

ころから、この神社の大らかさを感じることができます。二つの神社への参拝を済ませて二の鳥居から広場へ出ると、そこには社務所があり、売店あり、食堂ありで、神域から俗域に戻りつつあることを実感します。そしてそれらの建物やそこに集う人々を見守るように大黒様は常に微笑んでいます。大きくて金ぴかで剣を持った大黒様は、神性と俗性が混在するこの世界を象徴する存在となつてゐるのかも知れません。



report 活動報告

8月30日（土曜日）

ねぎぼうず 詩に触れて詩をつくろう

立春が過ぎてもこの猛暑、残暑の下仁田も緑の木々も元気がなさそう。

午後に「詩を知って詩を創ろう」のワークショップ。20名あまりの皆さん、暑さの中集まつてくださいました。

対談・国見修二・西館好子
後援・日本詩人クラブ

音楽にのせて詩の朗読・近藤征治

ギター演奏とうた・藤井秀亮

なぜ今詩が必要か、言葉は言霊から出る、それが今衰退しているのでは。伝えた

い言葉の大切さなどの話を、詩人の国見修一さんと理事長の西館好子が対談、次いで詩人で県の鳥獣管理士である貝塚津音魚詩作指導、みんなで詩を作りました。

荒れた里山に住む動物たち、そして里

に下りてくることに害をこうむる人間た

ち、それぞれの痛みを詩にして発表して

いる貝塚氏、貝塚さんは栃木県現代詩人

会長、国見さんは新潟詩人会を率い、その二人の心が賛同者に伝わつたのでしょうか、みんな自分の言葉で「詩」を作り、出来上がつた自作を朗読しました。

ゲストでギタリストの藤井秀亮さんが貝塚さんのイノシシの詩に作曲した歌が

恒例の高橋美清尼僧の「青空説法」地獄極楽の話、仏教の師匠の話、ここで説法の意味など楽しく多岐にわたりました。

終わりは「のんのさま」という唄を皆で唱和しました。美清氏のさわやかな笑顔で涼しきな雰囲気に包まれました。

激暑の夏、土・日は新しいお客様もお見えになり、その間上信電鉄の「ハロイン列車」運航の打合せなど、先の楽しい催事の打合せをしました。

東京に帰る私の手元に「梅ジュース」「な

す」「きゅうり」「トマト」など取り立ての野菜や果物がいっぱい。さて貝塚さんか

ら頂いた新鮮な「イノシシの肉」寒ければ冷し気な雰囲気に包まれました。

披露され、子守唄で締めて終了しました。楽しいワークショップでした。これからも折に触れてこんな催しをしてみたいと思います。終わつて下仁田の理事長自宅で「酒盛り」も楽しかつたです。人と人が触れ合うことの大切さは機械では味わえない生のうれしさでした。今日は野火止の近藤さんがカレーを作つてくれました。自作の梅干しとラッキョウを添えて。

8月31日（日曜日）

高橋美清尼僧の 「青空説法」

